

【学位論文審査の要旨】

●本申請論文について審査員が評価した点は、以下のとおりである。

1. 黒沼氏は、学部学生時代からの長期にわたるエジプト考古学への関心を持ち続け、学部生時代にエジプト先史文化研究の拠点の一つであるドイツへの語学留学を行なって、研究の基礎を作り上げた。

大学院生になってからは、博士前期課程の時期はエジプトの国内事情もあって、エジプトでの直接調査が困難になったが、ヨーロッパ各地の研究者との交流を行ない、第一線の研究者との関係を構築した。

その後は、国際学会での発表を積極的に行うとともに、エジプトや西アジアの遺跡調査への参加を果たすことができるようになって、本格的な研究活動が始まった。

2. 特に注目されるのは、イギリスピートリー研究所への数度に及ぶ調査を行って、W. M. F. ピートリーによる 19 世紀末のエジプト調査資料の未刊行情報（フィールドノートなど）を入手して、未検討情報を本論文の基礎資料にした点である。エジプトの先王朝期研究の開拓者であり、20 世紀以降、欧米研究者による数々の調査による古代墓の調査数を圧倒的に上回る墓地調査を実施しながら、ピートリーが公にした数冊の報告書や概説書では、その 1 割にも満たない情報しか取り扱われていなかった。

黒沼氏の入手したフィールドノートは、近年エジプト先王朝期研究者が注目し始めた資料であるが、それを利用した最初の論文が黒沼氏の学位申請論文であった。

3. 黒沼氏は現在、博士後期課程の時期からは国際学会で交流したオーストリア・ドイツ・フランス・イギリスの研究者のエジプト調査の調査団に参加したり、日本の西アジア先史研究者とのつながりで中東オマーンなどの遺跡調査にも参加したりと、若手研究者のなかで際立った研究活動を展開している。

4. 提出論文は、ナカダ遺跡の基礎遺物の情報について、時間をかけて分類し時系列に整理する地道な作業を行ない、これまでに検討できなかったナカダ遺跡の墓地の時期別序列を抽出した点に価値がある。2次資料ではあるが、これまでの研究では掌握できていなかった各墓に副葬された資料を黒沼氏の努力で提示した点は、今後の当該期社会の復元研究の新しい扉を開いた研究者の一人とする評価を受けることになると思われる。

5. また、そうした多数の資料を統計的手法を用いて分析して、王朝成立以前のエジプト社会に先行して集落内での序列化を認め得ることを示した点や、ナカダ遺跡の第二段階の時期には、かなり有力な階層の存在を示した点は、具体的な資料を基にした議論である点で、重要な内容と評価できると思われる。

●公開審査での審査委員の指摘と受け答えについては、以下のような内容があり、今後の課題が浮かび上がった。

1. 20 世紀中葉以降、欧米の研究者の研究については、研究史に妥当に整理されていて、課題抽出の過程が明確になっているが、今回の論文の成果について先史エジプト研究ではヒエラコンポリス遺跡・アビュドス遺跡の調査でも類似した想定が示されていたのではないかと（資料の十分な検討ではなかったが）？国家成立期の考古学的研究として、中国の国家形成期の遺物評価が抜け落ちているのではないかと？

⇒特徴的な墓制の確認という点では、アビュドス遺跡がこの地域のなかで最終的な覇権を握った集団の墓地遺跡と考えられるが、黒沼氏は明快な時系列墓地遺跡の分析の結果を基にした変容課程を明らかにしたところこそが重要で、地域社会のなかでのナカダ遺跡の新たな位置づけができたと考えている。それは、他の地域遺跡の変動とも連動して理解できるものなので、エジプトの国家形成の動向を示すことに成功したと考えている。中国の社会変容については大学院の演習などで検討したが、今回のエジプト墓地遺跡の分析の解釈には直接的に活用しなかった。

2. この地域の先史遺跡の年代測定の方法について、資料の扱いやデータの補正に検討の余地があるのではないかと？

⇒年代測定資料を求めたのは、埋葬儀式としての土器使用で土器内部に付着した炭化物からの同定が行われている。つまり、埋葬時の炭化物というコンテキストでのものであるが、日常に使用されたと思われる種類の土器もあるので、これについては今後検討する必要があるようだ。

海洋リザーバー効果（長い年月をかけての海流の存在から、魚介類の炭化物が古い測定値を出すこと）については、北部のデルタ地域での測定では議論されているが、ナイル中流域の先史社会の食料資源の状況からは一般的には認められていない。ただ検討する必要があるかもしれない。

3. ナカダ文化Ⅲ期の墓地の衰亡状況を、周辺の墓地遺跡の動向と比較して、この地域の国家形成の直前の動向を、もう少し議論ができたのではないかと？

⇒今回の論文は、ナカダ遺跡のフィールドノート情報の提示と分析を中心にしたものなので、エジプト先王朝期の一社会の動向を時系列整理したことに力点がある。ピートリーのセリエーション・SD 法は 20 世紀の考古学の遺物の序列研究でもよく引用されるものであるが、実際のところ、せつかくの調査事例を活用できておらず、現状では錯誤が存在することも分かってきた。今回全てには及ぶ事が出来なかったが、多数の墓地情報をもとに土器を整理してみたところ、ピートリーの錯誤を補正し得たと考えている。この情報からの社会変化過程の提示に注力したのである。指摘の課題は十分理解している

が ヒエラコンポリス遺跡・アビュドス遺跡の調査墓数は少なく、同じような分析をすることができないため、別途ほかの手法での検討で追及したいと思っている。